



シリーズ  
探訪・探究

# 訪れたいまち

第 13 回

岐阜県飛騨市古川町



古より伝わる「飛騨の匠」の技を受け継ぎ、歴史的な町並みを活かし、住民の暮らしと観光の両立を目指した町づくりを進めてきた岐阜県飛騨市古川町を訪ねてみた。

## 伝統を守り町に誇りを

岐阜県北部、まわりを高い山に囲まれた古川盆地にある飛騨市古川町。飛騨地方には「飛騨の匠」と呼ばれる優れた木造建築技術が有名で、古くは都の造営にも活躍した記録も残っている。現在の古川町の町並みにもその匠の技が活かされている。古川の町並みの原型は400年前の城下町まで遡る。その後、天領となったが、町には代官所が置かれず、武士が少なかったため、町民の自治が活発となり町人文化が栄えた。その文化が現在の町並みや町づくりの土台になっているという。

かつての町並みは、明治37年の大火によりそのほとんどが焼失し、現在残されている建物のほとんどがそれ以降に建てられた建築物だという。戦後、古川町では行政と住民が一体となって町並み、景観を活かした町づくりを進めてきた。始まりは1960年代の後半、観光スポットとして人気の高い瀬戸川の生活雑排水による汚染が進んだため、地元の新聞社が二斉清掃を呼びかけ、寄付を募り230匹の鯉を放流した。瀬戸川の清掃は現在でも「瀬戸川愛浴う会」により流域の5つの地区に組織され、地区の住民当番制で清掃が続いている。

もともと町づくりの土台があったが、組織だった町づくり運動が始まった

たのは町の20代、30代の青年たちが奮起し、青年会議所を設立、町づくりを始めたことからだという。青年会議所では地域の現状と問題点を模索した映画の製作を通じてお互いの共通理念を確立した。古川町観光協会も「商業主義に走らない町づくり、民間レベルで行う町づくり」を標榜し、観光関連事業者以外からも若手の理事を登用し、観光協会の目的も「観光」から「町づくり」に方針が転換され、活動が活発化したという。そして、現在の町づくり整備の出発点と言われる日本ナショナルトラストによる「町並み調査」が行われ、町並みや建物が学術的に評価された。

さらに、「古川町将来構想」をまとめ、町に提言を行い、町ではその構想に基づき瀬戸川の改修、飛騨古川まつり会館やその周辺の広場が整備され、住民の憩いの場、観光の中心として地域に定着した。

また、隣接して飛騨の匠文化館が建設され、住民は伝統技術のすばらしさを改めて自覚し、周辺の町並みの改修や保存が加速し、現在の落ち着いた町並みの景観を作り出すきっかけとなったという。

## 祭、匠、瀬戸川が町のキーワード

町の見どころを飛騨市観光協会、森要専務理事に案内してもらった。



町は清らかな水が流れる瀬戸川を中心に武家の町と町人の町に分かれている。瀬戸川と白壁土蔵街は最も人気のある観光スポットだ。

「円光寺と瀬戸川筋はかつて作家の司馬遼太郎が飛騨随一の街並みと絶賛した風景です」

なるほど、町を歩くと飛騨の匠の技が息づく落ち着いた町並みが続く。個々の家を見ると軒下の腕木うでぎの下に白く塗られた彫刻があるのに気づく。

「この彫刻は『雲』といいます。古川には今も飛騨の匠の技を持つ大工さんが活躍しています。この家は私が自信をもつて造りましたという古川大工の誇りを示しています」と教えてくれた。この「雲」は戦後生まれで、大工人ひとり形が決まっている。昭和61年の調査では169種類あったそうだ。



かつて作家の司馬遼太郎が飛騨随一の町並みと絶賛した円光寺と瀬戸川筋。

「飛騨の匠」の技を受け継ぐ大工が町内だけでも123人もいたということに地元の人々も驚かされた。

また、昭和60年より新築などの建物を対象に、古川らしい町並みや自然に調和した建物などを表彰する「古川町景観デザイン賞」を創設した。受賞された家の玄関先には受賞の証の表札が掲げられている。この制度により住民の景観を大切にする意識も高まったという。

町のあちこちの通りに面した民家の軒下に花が飾られているのを目にすることができ、「みんな、花をいっぱい咲かせて、美しい飛騨古川をみてもらおうよ!」との思いから、平成14年に「花で町並みを飾る会」が結成された。「町の人々が花で訪れた観光客をおもてなししています」と語る。町には旅人の駅があり、食事処や休み処、トイレ、お土産物の販売、パンフレットなどが置かれている。また、平成7年に「飛騨古川夢ふるさと案内人会」が発足し、観光客に町の見どころ案内をボランティアで行っている。

町の中心地には「真宗寺」「本光寺」「円光寺」と大きなお寺が3つある。明治の大火で2つの寺は焼け、円光寺だけが大火からまぬがれた。寺は建設の際、本堂の妻まよに何を彫刻したらよいか思案にくれていたところ、旅の老人が「亀を彫っておけば火災から逃れる」とひとこと言って立ち去った。明治

※妻…屋根の両端の三角になった壁面



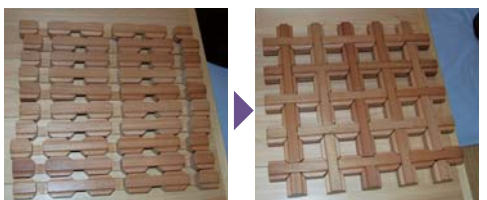
「飛騨の匠文化館」。建物は飛騨で育った木材を使い、飛騨の匠の技を受け継ぐ地元の大工さん達によって建てられ、組手や継手を用いているのが特徴。館内には大工道具の展示や木組みなどの体験コーナーがある。



建物を建てた大工達の様々な「雲」を見ることができる。



古川大工の誇りを示すシンボルの「雲」。大工一人ひとり形が決まっている。町を歩くと様々な形の「雲」に出会うことができる。



左/組木 千鳥格子(組み立て前)、右/組木 千鳥格子(組み立て後) 千鳥格子の体験コーナー。1本1本の木を組みあげると見事な千鳥格子に。



夢ふるさと案内人として観光客へ見どころを説明する森さん。法被(はっぴ)がトレードマークだという。



飛騨市観光協会専務理事の森 要さん。旅人の駅の食事処「味処古川」の施設長、飛騨古川夢ふるさと案内人会会長も兼ねている。

飛騨市観光協会  
<http://www.hida-tourism.com/>





旅人の駅でもある「味処古川」。市街地中心部にあり、飛騨の匠の伝統技術を駆使した町家造りの店舗。各種おみやげ、朴葉味噌や飛騨牛など古川ならではの味が堪能できる。近隣には「飛騨古川まつり会館」、「飛騨の匠文化館」、「円光寺」などもあり観光の拠点として最適。営業時間9:00~17:00(ラストオーダー16:00)、不定休。



落ち着いた佇まいの町並みが残る武家町の町並み。



瀬戸川を泳ぐ鯉。4月~11月には1,000匹放流されている。



町には「花で町並みを飾る会」により、至る所の軒下で花が飾られているのを見ることが出来る。飛騨古川を訪れた方に、いい町を見ていただくために何かできないかと、13名の女性が集まり、取り組みが始まった。



上/古川町景観デザイン賞を受賞された家。昭和60年から始まり、平成22年度までに111件のデザイン賞が受賞され、古川らしい町並みの保存に住民も積極的に取り組んでいる。受賞者の家には「古川町景観デザイン賞」の表札が掲げられている。左/「景観デザイン賞」表札。

町では毎年1月15日には「三寺まいり」が行われ、静かな寺院の佇まいの中、揺れる和ろうそくの炎や大雪像ろうそくの暖かな灯りが町を彩る。その昔、若い娘たちが着飾って瀬戸川べりを歩いて巡拝し、男女の出会いが生まれたという。

「信州へ出稼ぎに行っていた娘達も三寺まいりを楽しみにしていて、正月には帰省し、着飾って巡拝したと聞いています」と森専務理事。

の大火でも本堂の妻に彫刻された「水呼びの亀」によって類焼からまぬがれたと伝えられている。

飛騨地方では、明治から大正時代には多くの若い娘が信州の岡谷や諏訪の製糸工場へ糸引きの女工として出稼ぎに行った。2月半ばを過ぎると、信州へ出稼ぎに行く古川周辺の若い娘達は、町の八ツ三館で1泊し、翌日、高山で周辺の村々から集まってきた人達と雪深い野麦峠を越えて行った。当時の貧しい農村では、娘たちが働いて得た賃金は大変貴重で、娘たちもお父さん、お母さんを助けるため、懸命に働いたという。八ツ三館へ向かう霞橋のもとには「野麦峠の碑」がある。小説や映画の『ああ野麦峠』では当時の出稼ぎ女工の様子を、過酷な労働と厳しい生活環境として伝えられているが、石碑には「まるで楽しい遠足にでも出かけるよう元気に出発していった」と刻まれている。

古川町には国の重要無形民族文化財に指定されている「古川祭」が毎年4月19日、20日に開催される。この祭りは「静」と「動」の祭りといわれている。「静」は屋台行列で飛騨の匠の技がほどこされ、華麗に装飾された9台の屋台が町を巡行する。「動」は起こし太鼓で数百人の裸の男たちが担ぐ櫓に大太鼓を乗せて町を巡行し、町内12組の付け太鼓をもつ男たちが町の辻々で大太鼓がけ我先にと突っ込



明治の大火から寺を守ったといわれる「水呼びの亀」の彫刻を見ることが出来る。



明治の大火からまぬがれた円光寺。



加していく中、観光協会では町の人が

受け継がれていく町並み

相場とともに

ら屋台蔵を守っている。

町内には10の屋台蔵があり、祭りで使用される屋台は普段はこの中で保管されている。屋台は大変デリケートなため、屋台蔵は湿気を防ぐため、土蔵造りとなっている。屋台は台組と呼ばれる組織で維持・管理され、屋台蔵の扉の上部には「台紋」と呼ばれる台組のシンボルを見ることが出来る。ほとんどの屋台蔵の近くには「秋葉様」と呼ばれる火の神様が祭られ、火災から屋台蔵を守っている。

また、隣接する「飛騨の匠文化館」は飛騨の匠の技を受け継ぐ地元大工により建てられ、建物は金具を使わず、全て組手、継手を用いているのが特徴。館内では飛騨の匠が使っていた大工道具などが展示され、継手や木組みの体験もできる。この2つの施設は古川町を知る上で欠かせない見どころだ。

んで攻防戦を繰り広げる。この古川祭の様子は「飛騨古川まつり会館」で三百インチ大画面の3D映像で見ることが出来る。屋台のからくり人形を再現した人形の実演やからくり操作の体験もでき、飛騨の匠の技がほどこされた屋台や起こし太鼓などが展示され、祭りの雰囲気を感じられるようになっている。

くだろう。

受け継がれていく町並み

相場とともに

それを崩すことを嫌ってきたという。飛騨の匠の技が息づく美しい町並みと景観は、これからもこの「相場」の伝統とともに人びとに受け継がれていくだろう。

見どころがあり、昨年度は各地域の魅力の洗い出しを行いました。こうした地域の宝を活用し、観光関係者だけでなく住民と共に商品開発を行ってきたい。

の町並みは先人たちが取り組んできた結果であり、従来の町づくりは二通り終わったと感じています。地域の活性化のためには、新しい町づくりの組織を整え、地域の経済が回る仕組みづくりが必要。古川町以外でも沢山の

との生活を疎外しないで観光関連事業者が成り立つために、年間100万人を交流人口目標と定めた「100万人構想」を町に提言した。観光化しすぎず住民が住みやすい町、いい町をつくれば、おのずと観光客も増えてくる、という気持ちがかめられている。



平成に入り作成された「瑞鳳台」。屋台作りを継承するため古川の若い匠たちが力を合わせて完成させましたと語る館長の谷村省三さん。



三寺まじりの千本ろうそく。願いをこめて白いうそくを灯してお参りする。願いが叶ったら次の年に赤いうそくを灯す。ろうそくの暖かな明かりが瀬戸川を照らす。



明治から大正にかけて、古川周辺の多くの若い娘たちがここから信州に向け、野麦峠を越えて行った。



現在も実際に祭で使われている清濁台。町には9台の屋台があり、そのうち3台を定期的に入れ替えて展示している。



起こし太鼓と付け太鼓。展示用で本物は神社で保管している。



飛騨古川まつり会館。館内では古川祭を3D映像で体験、飛騨の匠の技と粋を集結した絢爛豪華な屋台など祭に関する様々なものを見ることが出来る。